四二紙　―シニカミ―

泣虫太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
四二紙　―シニカミ―

【Ｎコード】
Ｎ４１１２ＢＡ

【作者名】
泣虫太郎

【あらすじ】
ある日。ただの高校生である春元夏人は、カラスにリンチに遭っている所をとある女の子に助けられる。しかし、その女の子は、生きている人間ではなく、シニカミという……幽霊だった。そして、その日を境に、なぜか夏人は、シニカミＶＳ悪霊達のオカルト戦争に巻き込まれて……

第一話　シニカミ

俺は、走っていた。

……いや、別に、走っていると言っても、それはランニングとか、体育での準備運動の類いじゃない。

本気で、全力疾走しているのだ。

後ろから執拗に攻撃してくる、あの黒い群れから逃げる為に。

「くそったれ……っ！」

はぁはぁと荒く呼吸をしながら、俺は、奴らから逃れる為に細い横道に入った。が、それでも奴らを巻くことは出来ない。奴らは、バサバサと物凄い速さで俺の後ろを追いかけ、俺へと執拗に攻撃を仕掛けてくる。……たく、何てしつこさだ。

「なんでっ、俺がっ！　何もっ、やってないっ、俺がっ、狙われるんだよっ！」

さっきから俺は、鞄で頭をガードしつつ走りながら、何か、奴らを怒らせることをしたかと必死に考えていた。だが、思い当たることなどちっともない。

光り物をちらつかせた覚えもないし、石すら投げた記憶もないわけだし……、一体、何が原因だというのだ。

「いて、いててっ！」

……しかし、知らなかった。

奴らが、こんなにも飛ぶのが速くて、何よりも、こんなにクチバシが痛いものだということを。十六年生きてきて初めて、知った。

――意外と、強かったんだな。カラスって。

そんなことを頭の片隅で思いつつ、俺は、この状況を打開する方法を考えた。

だが、なぜ、襲われているのかすらもわからないのだ。そんな方法、わかるわけがない。

ということは、俺は、奴らが諦めるまで、体力が続く限り、走り

続けなければならないということになる。
――冗談キツイって……！
運動がそれほど得意じゃない俺にとって、このまま逃げ続けることは、不可能だろう。
このままいけば、まず、俺は地面に倒れ、そして、カラス共にそのクチバシで飽きるまでリンチに遭うであろう。
カラスにリンチに遭う日がくるなんて……、思ってもみなかった。
……そんなこんなで、近所の公園にたどり着いた時には、予想通り、俺の体力は、限界を超えていた。
足が棒の様に重く、荒い呼吸のせいで胸と喉が痛い。
「っ……！」
到頭、俺は力尽きて、バタリと前から地面に倒れてしまった。
そんな俺を、カラス共がゴミを漁るように突く。
だが、その頃には俺は、抵抗する気力も無く、ただただ、突かれて……、バサッ。
……その時だ。何やら、棒か何かを振った音がしたと思ったら、カァーッ、と一声。カラスの一匹がどこか悲鳴に近い声を上げた。
「？」
次の瞬間。その声を聞いた他のカラス達がザァッと俺から離れていく。
――何が……、起きたんだ……？
俺はジンジンと痛む身体を少し起こして、視界を上に向けた。と、そこには、宙に集まったカラス達を前にして一人。誰かがそこに、夕日色に染まった一本の棒を構えて、俺を庇う様に立っていた。
――女、の子……？
その子は、真っ黒のスーツに身を包んでいた。その横顔は、まるで透き通っているかの様に真っ白で、　その短い髪の毛は白……というよりもキラキラしていて銀色に近い。
だが、明らかに日本人とは違う肌色、髪の色なのに、外国人には思えない。瞳の色が黒いからだろうか。

「あなたが……、柊、あき、ですか……？」
その姿に思わず見取れていると、突然、俺をじっと見つめて、そのどこか不思議な雰囲気の女の子は、そう疑問形で口にする。
――柊、あきだって？
俺は、聞き覚えがあるその名にピクっと眉毛を動かした。
そして、彼女を見上げる。
「お前、あき姉のこと、知ってんのか……？」
と、なるほど。そんな顔をして、彼女は、こちらにちらっと向けていた顔を前に戻した。
「そんなわけないですよね。だって、どう見ても、貴方は男ですから……ごめんなさい」
女の子は、なぜか俺に謝ると、ピッと手に持った棒をカラスの方に突き出す。
その瞬間、まさか、と俺の中で嫌な予感が過ぎる。
「おい、まさか、それでカラスをぼこる気じゃ……」
「はい。だって、相手は“死魔人”ですから」
「“シマヒト”だって……？」
その単語に、俺はドキリと鼓動を鳴らした。
だって、それは、こんなところで聞くわけがない単語だから……
「ハァッ！」
そんな固まった俺を他所に、その単語を口にした女の子は、迷うことなくカラスに駆け寄り、そして、その棒を振り下ろした。途端にバサッとカラスは、散らばり、黒い羽根を辺りに撒き散らせる。
女の子が振り下ろした棒は、まず一匹。見事カラスに当たった。
途端に、シュンッとカラスの姿が煙りとなって消えてしまう。
……普通じゃ、ない。
俺がそう愕然としている内にも、ボンボン、ボンボン。カラス達は棒で叩かれ煙りになり消えてゆく。
そして女の子は、クルンと棒を手の平で回し、軽やかにステップをして、次々とカラス達を消していくと、あっという間にカラスは

残り一匹だけとなった。
「終わりですっ！」
クルンと棒を回転させながら女の子は、最後の一匹に棒をくるくると勢いよく向けてゆく。
だが、その時だった。
「えっ！」
突然、向こうから、一匹の黒猫が女の子へとシャーッと鳴いて、襲い掛かった。
そのせいでグラッ。女の子は、バランスを崩し、その勢いでカランっと棒を落としてしまう。
「しまった……！」
途端に、チャンスとばかりにカラスがその鋭いクチバシを光らせる。
だが、そのクチバシはさっきとは異なり、どこか、異様な気を放っている様に思える。
「逃げろっ！」
その異様な気に、とっさに、俺はそう叫んでいた。
だが、女の子は、目を大きく見開いて、パチッ。目をギュッと閉じた。
……駄目だ。やられる……っ！
だけど、助けようにも俺はこの様。そこら辺にある石ころをかろうじて投げられるかどうかだ。だが、そんなことをすれば、当然、奴の攻撃は再び俺へと向くだろう。
――くそったれ！！
「このっ！！」
短い葛藤の末、俺は、投げた。目の前にあった、その石ころを。
途端に、カラスは怒りの声を上げ、ギラッと標的を変えると、バサッとこちらに進路を変える。
――あぁ、やっちまった。
その瞬間、俺の中に物凄い後悔が溢れ出した。と、同時に、終わ

ったな、という諦めが湧く。
あれは、どうも普通のカラスではないようだし、俺もただじゃ済まないはずだ。
俺は目を閉じた。
「……やれやれ」
――だが、俺の予想は、大きく外れることになる。
まず、一つ。目を閉じた瞬間、暗闇に誰かの呆れたような声がした。次に、二つ。ブンッと何かを振った音と、カラスの長い鳴き声が辺りに響いた。
そこで、俺は、自分の身に何も起きていないことに気付き、ゆっくりと目を開けた。
そして、すぐに。黒いシャツを着た誰かの後ろ姿が俺の目に飛び込んできた。
それは、さっきの女の子……と似た、スーツ姿の男だった。
まず、その少し伸びた髪の色。それから、ジャケットはなかったが、その黒の格好。そして、雰囲気。　どれも、あの女の子と同じだ。
違うといえば、その手に持った、長い槍。
男はそれをクルンと一回転させると、槍は、シュンッと姿を消した。
「……で？　こいつ、誰？」
そして、ポリポリと頭を掻いて、第一声。男は、ちらっとこちらを見ると、そう、ぺたんと地面に座り込んだ女の子に尋ねるのだった。

――ひどい目に遭った……
俺は、ボロボロの身体を引きずる様に何とか家までたどり着いた。と、部屋に入ってすぐに、バタン。制服のジャケットを脱ぐと、ベッドの上に倒れ込んだ。

「……しかし、なぜ、彼が狙われたんでしょうかね？」
「加えていえば、なぜ、こいつは俺達の姿が見えているんだろうな？」
「……それは一番、俺が知りたいよ」
扉も開けずに、なぜか、俺よりも先に部屋に上がっていたそいつらに、俺はため息を溢す。
霊感などないはずなのに、それを今、見ているなんて……、悪夢に近い。
「ま、恐らく原因は、あき、だろう。お前、従弟なんだろ？」
「……まぁね」
そう俺に尋ねたのは、さっきの黒スーツの男である。先ほどの自己紹介では、セトという名前だということと、ちなみに名前の由来が七月七日に死んだからという、どうでもいい説明まで受けている。
「では、柊あきの近くにいた為に、霊感がついた、というわけですか……なるほど」
次にそう言ったのは、さっきの女の子……つばき、である。
――あの後、この二人によって助けられた俺は、詳しい話をするために二人を家へ招いた。
なぜそんな必要があったのかと言うと、この二人が『普通』じゃないからだ。
では、一体こいつらは何者か。
……彼等は、いわゆるところの、幽霊ってやつだ。
んで、さっきの自己紹介によれば……職業は“シニカミ”とやらで、現世には仕事でやって来たらしい。
ちなみに、さっき俺を襲ったのが、死魔人（シマヒト）。悪霊や悪魔の類で、シニカミの敵に当たるそうだ。
――と、まぁ、普通、そんな話をすぐ、信じる奴はいないだろう。
嘘だと言って、笑い話にするだけだ。
だって、幽霊だぞ。幽霊。
それ自体が科学的に証明されていないオカルトだっていうのに、

幽霊達が戦争してるだって？　ふざけるな。てか、幽霊に職業なんてあるか！
……そう思うのが普通だ。
だが、少なくとも、この俺――春元夏人は、そうじゃない。
いや、別に、頭は正常だし、気が狂ってるいるわけじゃない。
ただ……、前にも、同じような話を聞いたことがあるのだ。
シニカミと死魔人（シマヒト）との戦争、“霊戦（レイセン）”とやらの話を……
……ま。だからと言って、丸々信じるわけではないが。なんせ、聞いた情報元がいい加減だからな。真実、とは限らない。
「……ところで、あのカラス……何で俺を襲ったんだ？」
俺は、ベッドの上に座りなおすと、そう、二人に尋ねる。
それに対し、セトは考える素振りさえ見せずに、
「知らん」
そう、即行で答えた。……まぁ、さっきから、二人でそのことについて考えていた様だし、当たり前の返答と言っちゃ、当たり前だが……もう少し、考えてから答えてほしいものだ。
「でもなー。知らないからってお前を放置っつうのも、アレだしなぁ。……仕方ない。一回、上に帰ってアマさんに聞くか、うん」
「……セトさん。いくら長いからって短縮するのはよくないですよ。アマノジャクさんに怒られても知りませんから」
「いいんだよ。あの人が怒ったって俺の仕事が増えるだけだから」
そう言って、セトはニカッと笑みを見せる。そんなセトに対して、
「……ほんと、貴方って変わり者ですよね」
つばきはそう言うと、やれやれとため息を溢した。
「アマノジャクって？」
「私たちの上司に当たる人です。本当はお名前がないんですが、それじゃ、ちょっと不便なので、シニカミの誰かがそう名前を付けたんですって」
「へぇ……」
「ま、最初の頃は、アマさんも嫌がってたけどな」

確かに、『天邪鬼』なんて名前、誰だって嫌がるだろうな。もっと、いい名前を付けてあげればよかったのに……かわいそうに。
「……そういえば、お前らさ。あき姉に会いに来たんだっけ？　何のためかは知らんが」
そこで、ピクリ。
俺の何気ないその問いに、つばきの表情が一変した。
と、そんなつばきの表情に、机の上で足を組んでいたセトは、なぜか苦笑いを浮かべる。
「？」
――俺、なんか変なこと言ったか？
二人のその様子に俺は、首を小さく傾げた。
「あきさんは、死魔人（シマヒト）に命を狙われているんです」
と、しばらくして、つばきがそう、沈黙を破る。
「だから私は、彼女を守りにきた……ただの、シニカミとして」
「つばき……？」
どこか強い意志を秘めたような口調で、つばきは独り言のようにそうつぶやいた。
と、すっと立ち上がって……そのまま、つばきはふっと姿を消してしまった。
それを見て、セトはやれやれとため息を溢した。
「私情は捨てろって言ったのによ……たく」
「……なぁ」
「ん～？」
「つばきって、あき姉と何かあったのか？」
「ちょっとな」
セトは、俺の問いにさらっとそう答えると、はぁとまた、ため息を溢す。
「つばきがシニカミになったのは……まぁ、あきのせいだからな……」
「えっ？」

そして、ボソッと、とんでもないことを呟いた。
――それは、つまり……あき姉がつばきを……？
その台詞に俺は、思わず目を見開く。
――まさか……
と、同時に、俺の脳裏の片隅で、『ある予感』が過ぎった。

「いってきます」
かったるい気分で俺は、そう言って玄関の戸を閉めた。
時刻は、朝の八時ニ十分。いつもよりも大分遅めに家を出た俺は、すぐ、黒スーツの人影を発見する。
それは、間違いなく、つばきだった。
つばきは、道路の脇で、俺の家の真向かいにある青い屋根の家を見上げて、まるで人形か何かの様に突っ立っている。一切、微動だにしない。
「おい」
その様子に俺は声をかけた。
と、チラリ。つばきはこちらに少し視線をやって、すっと体の向きを俺の方へ変える。
「おはようございます」
そして、ペコッと頭を下げた。
「……何やってんだ？」
つばきが頭を上げて、俺は、そこに突っ立っている訳を尋ねる。
「いえ……あきさんを待っているのですが……」
と、俺の問いにそう答えたつばきは、また、青い屋根の家……あき姉の家を見上げた。
……どうやら、つばきは、ずっと、ここでこうして待っていた様だ。だが、いくら待っても、お目当ての本人は現れずじまい……、というわけか。
……まぁ、あき姉は遅刻魔だからな。まだ、しばらく出て来ない

ことだろう。
「あき姉なら、しばらく出て来ないと思うぞ。そういう人だから」
俺がその旨を教えてやると、つばきは、何かを考える様に唇に右手を当てる。
「困りましたね……」
そして、小さくそう呟いた。
「何か、用事でもあんのか？」
その様子に、俺は、スクールバックを背負い直してそう尋ねる。
「いえ、用事というか……私は、貴方も守らなければなりませんから」
「セトは？」
「天界に戻りました。しばらくは戻ってこないかと」
「じゃあ、ここであき姉を待つか、今、俺と一緒に学校まで行ってまた引き返すか、どっちかだな」
「はい。でも、後者の提案には一つだけ問題が」
「？　問題って？」
「私はあきさんに会ったことはありますが、あきさんの顔は知りません」
「は？」
つばきのその言葉に俺は、思わずそう声に出した。
会ったことがあるのに顔は見たことがないだと？
それは会ったことがあるとは言わないんじゃ……
俺は、つばきの顔を見て、しばらく停止する。
「……何か、誤解をしている様ですね」
「誤解って？　どの辺が？」
と、つばきは、ふぅと小さく息を溢す。
「……私は生前、目が見えなかったんです。だから、あきさんの顔や外見を知らないんです」
「……あ、そういうこと」
つばきの説明に俺は、“知らない”とはそういう意味だったのか、

と、改めて理解する。
「じゃあ、あき姉の家から離れるわけにはいかないよな……」
「はい。……ちなみに彼女はいつ出てくるでしょう？」
つばきの問いに俺は、いつもあき姉が来る時間帯を思い出す。
俺が窓からグラウンドを見ている限りでは、確か、一時間目の最中には一回も見かけたことがない。かと言って、二時間目の頭にある十分休みにも見かけた試しはない。
見かけるとしたら……そう。二時間目の中頃か、三時間目辺りか。
「ん～。多分、あと、一時間くらいは軽く寝てるだろな」
「……困りましたね」
つばきは、更に困った様な顔付きで小さく唸った。
その様子は、まるで他人事とは思えない程の真剣さである。ましてや、自分がシニカミとなる原因を作った人の為とは、全く思えない。
「……夏人さん」
「ん？」
「夏人さんも一緒に待つってことは出来ないでしょうか？」
「……」
――それは、俺も一緒に遅刻しろということでしょうか？
控えめにそう聞いてきたつばきに、俺は固まった。
普通、遅刻したら、その訳を問いただされる。そして、その理由がくだらない場合や、特に無しといった場合、当然、先生に叱られる。
ちなみに、うちの担任はかなり厳しいと有名である。
この前なんて、寝坊でちょっと遅刻したという生徒に対し、朝のホームルームを返上して、長々と説教をした。挙げ句に、罰として職員用のトイレ掃除まで命じた始末である。
もちろん、俺は、トイレ掃除なんて御免だ。
……となれば答えは一つ。
「……じゃあ、俺、先に行くな」

「えっ？　ちょ、夏人さん！」
俺は、ひょいっと片手を上げると、つばきに背を向けた。
後ろからつばきの制止の声が飛ぶが、知ったことか。罰を受けるとわかっていてわざと遅刻する奴なんか、あき姉くらいなものだ。
それに、いくら、昨日、死魔人（シマヒト）とやらに襲われたからと言って、今日もまた、襲われるとは限らない。
しかも、まだ、早朝だ。幽霊っていうのは夜に現れると相場が決まっているしな。
「……みーつけた！」
――え？
と、つばきでも俺でもない、突然登場した第三者のその可愛い声に、十字路の真ん中に立った俺は、ふと、右を見る。
そこにいたのは、黒い、浴衣姿の少女だった。　その小さな少女は、俺と目が合うと、にっこり、ユサッと横で結った髪の毛を揺らして笑うと、その何も履いていない足でぴょこぴょことこちらに歩み寄って来る。
「君、夏人君、だよね？」
「えっ？」
そして、そう言って、ピタリ。俺の目の前で、タンッと止まると、
「早速だけど、死んでくれないかなぁ？」
少女はそう物騒な言葉を口にして、どこからか現れた銀色の鎌を手に、にっこり微笑んだ。
それは、その小さな少女の背丈以上はある大きな物で……
「逃げてっ！　夏人さんっ！」
「っ！」
そこで俺は、今、目の前で昨日と同じく、有り得ないことが起きていることに気が付いた。
そして、自分の命が危ないことも。
「やぁっ！！」
「っう！！」

ブンッ！
まず一振り目。目の前のその少女は、躊躇することなく、その度でかい鎌を俺に振り下ろす。
それを何とか避けて、俺は、再び目の前に鎌が振り下ろされたのを捉える。
――これは……間に合わない！
俺はギュッと目をつぶった。
と、カキーン。
そこで、俺の前に、黒い影が割り込んでくる。
「つばき！」
「はぁっ！」
つばきは、銀の棒で鎌を止めると、それを弾き飛ばす。
少女は押し返されて、後ろへピョンッと、軽やかに下がった。
キャハハッと、笑い声が辺りに響く。
「久しぶりだねぇ。つばきちゃん」
「朱音……っ！」
そう言った少女に、つばきはキッと睨みつけると、銀の棒をその少女に向けた。
と、それを見て、何が面白いのか、少女は声を上げて笑い出した。
「つばきちゃん。つばきちゃん。君じゃあ、朱音ちゃんには敵いませんよぉ～？」
「っ……」
少女は、笑いながら、つばきを馬鹿にした様にそう言う。
それに対して、少女の言っていることは図星なのか、つばきはキュッと唇を噛んだ。
「そうだねぇ？　セトちゃんとかならわかんないかなぁ～？　でも、つばきちゃんはムリ。あたしには勝てない」
「……だから？」
睨むつばきに少女は、また、笑みを浮かべる。
「だから、逃げた方がいいよ。あと、助けを呼ぶとかさ～。つばき

ちゃんは、雑魚死魔人（シマヒト）の相手は出来るかもしんないけどさ、あたしは荷が重いって。ね？」
「……それは無理な提案です。今、ここにいるのは私だけですから。逃げるわけにはいきません」
と、きょとん。少女は不思議そうな顔をする。
「あれ？　セトちゃんは？」
「今はいません」
「他のシニカミは？」
「この地域にはいません」
「ふーん」
それを聞いた少女は、何やら考え始めた。……と、ニヤリ。
何か悪いことでも思い付いたのか、少女の口元に悪い笑みが浮かぶ。
「でも、あきがいるじゃん」
「……あきさんはもう、シニカミじゃありません」
「そうだっけ？　でも、それじゃあ、あの時みたいにさぁ、無様に助けてなんて言えないよね～」
「っ！」
その瞬間、少女のその言葉につばきの表情がガラッと変わった。
手は、プルプルと奮え、棒へとその振動がカタカタと伝わる。
「……つばき？」
俺はつばきの側で、そう小さく名前を呼んだ。だけど、つばきはそのまま、険しい様な……、そんな怖い顔付きのまま、震えている。
――これは……、怒り？
「っ！！」
そして、辺りに、ただならぬ空気が出始めたその時、つばきは、少女へ飛び出した。
それを少女は、面白い物を見ているかの様に笑みを浮かべて見る。
――駄目だ……！
誰だってわかる。

つばきは、完全にこいつの挑発に乗ってしまった。
そんなんじゃ、こいつには敵わない……！！
「つばき、駄目だ！！」
俺は、飛び込んで行ったつばきに向かってそう叫んだ。
だが、頭に血でも登っているのか、つばきは止まる気配は全くない。
「止まれ！　つばき！」
少女まであと数メートル。
止まらないつばきに再び、俺は声を上げるが、駄目だ。まるで、聞こえていない。
「つばきっ！」
つばきは、棒を振り上げた。
だが、その瞬間、少女の姿がシュンッと消える。
「っ！」
それに驚き、立ち止まるつばき。
棒を構え、辺りを探すが、少女の姿はどこにも見当たらない。
だが、つばきが視線を向こうにやった、その時だ。
黒い影が俺の前にぼやけて、少女が現れる。
そして、キランと光るその鎌は、しっかりとつばきの背後に向けられていて……
「つばき！　後ろっ！」
俺は叫んだ。
だけど、つばきがそれに気付いて振り返った時にはもう遅い。
「は……！」
その時には、すでに鎌は振り上げられた後で……
「だから言ったでしょ？　君じゃあ、ムリだって」
少女の台詞の後、ブンッと鎌が振り下ろされた。
――だが、すぐに、少女の表情が変わる。
「……あぁ、もう。一体誰よ」
鎌の先に見えたのは、ブラウスと赤と緑のスカートの制服に身を

包んだ、分厚い長い髪の少女。手には、時代劇で目にするような赤い持ち手の、長い日本刀が鎌の刃と当たって、ガチガチと音が鳴っている。

そして、バサリ。風に乗ってこちらに飛んできたのは、まるで物干し竿でも入ってしまいそうな、縦に長い赤の布製の袋。

――これは……、間違いなくそうだ。

鎌を止めたその人影はしばらくして、はぁとため息を溢す。

「……私の睡眠の妨げをした奴は」

そして、あき姉は、さっき言った言葉の続きを不機嫌な声でそう言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4112ba/

四二紙　―シニカミ―

2012年1月10日21時45分発行